

# 多摩デポ通信 第43号

特定非営利活動法人共同保存図書館・多摩

2017年8月11日発行

〒182-0011 調布市深大寺北町一・三二・一八

●HP / <http://www.tamadepo.org/>

●E-Mail [depo\\_tama@yahoo.co.jp](mailto:depo_tama@yahoo.co.jp)

5月に通常総会を行ない、議案が原案どおり可決されてから2ヶ月半が経ちました。次の「講座」企画の決定とブックレット第11号刊行を待って、通常の季刊から半月遅れた「多摩デポ通信」の発行です。

紙面を紹介します。

会員の皆様には「総会報告」をお送りしましたが、今号には、永江朗氏による「総会記念講演会」の内容及び参加者の感想を載せました。同封した報道記事と共にお読みください。

6月には多摩地域図書館

長協議会第2ブロックの合同研修会として、「TAMALAS説明会」を開かせていただきました。ホームページで公開中の入力方法に加え、準備中の大量一括蔵書確認システムを紹介し、良い反響を得ました。

新理事堀越洋一郎と、副理事長を退任し顧問就任の平山恵三の原稿を掲載しました。「挨拶」ではなく、熱い「提言」となりました。

そして9月に開催する「多摩デポ講座」です。実務の除籍と保存の流れを踏まえた、実践的な講座を考えています。ご期待を！

## 第30回多摩デポ講座

パネルディスカッション

### 『除籍候補資料の処理を考える』

—除籍と保存のジレンマを解消するために—

TAMALAS の発展形、大量一括蔵書確認システムがまもなく公開されます。図書館現場の除籍と保存の流れに、どのように組み込んで使うことができるでしょうか？

パネリスト: 中原千佳氏 / 西東京市図書館

パネリスト: 吉本龍司氏 / (株)カーリル代表

パネリスト: 堀越洋一郎 / 多摩デポ理事

コーディネーター: 齊藤誠一 / 多摩デポ理事

日時: 9月18日(月) 午後6時30分～9時

会場: 国分寺労政会館 第3会議室 (3階)

国分寺駅南口5分 国分寺労政会館 ☎: 042-323-8515

主催・問い合わせ先//多摩デポ

参加費 500円 (資料代)



5月21日総会の様子

◆多摩デポ講座のお誘い

「除籍候補資料の処理を考  
えるー除籍と保存のジレンマ  
を解消するために」

9月18日(月・祝日)夜

TAMALASとその発  
展形「大量一括蔵書確認シ  
ステム」の実用化の見通し  
を得て、改めて、図書館業  
務の中の〈除籍と保存〉  
について、いくつかの立場  
から経験や見方を重ね合わ  
せてみたいと思います。

図書館の蔵書は、現物の  
紛失や回収不能や汚破損に  
より、個別資料ごとに随時  
除籍することもあります。

しかし、社会の中に生み  
出される新しい出版物に常  
に目を配り、選書し蔵書に  
加えていく〈生きた図書館〉  
にとつては、その一方で、  
増え続ける蔵書を管理して  
いくことも日常業務です。  
蔵書の点検を常に行いつつ

〈これはまだ保存する↑↓  
可能なら除籍もあり〉とい  
う選別を行っています。そ  
の結果、閉架、開架の書架  
から一定量の除籍候補資料  
がピックアップされてきま  
す。除籍候補の選別に始ま  
り、除籍か保存かの判断を  
経て進められます。保存と  
判断した資料のその後の処  
理も必要なわけで、そのワ  
ークフローは重要です。

多摩地域では、どの自治  
体の図書館も開館後40年以  
上が経過しています。有限  
なフロアと書庫から成る図  
書館が、今後も〈図書館と  
して〉持続し発展可能なシ  
ステムであり続けるために  
は、進化が必要ではないで  
しょうか。多摩デポでは、  
除籍する資料を最小限にと  
どめ、いかに地域に資料を  
残していくかを考えてきま  
した。

昨年、西東京市図書館か  
ら7000件以上の大量の

除籍候補資料の調査を依頼  
され、ISBNがある資料  
はTAMALASでの大量  
一括検索を行い、ISBN  
が無い資料は都立図書館の  
「統合検索」を使って手入  
力で調査しました。そして  
検索結果をお返しし、除  
籍・保存の処理に生かして  
いただきました。この経験  
を通じての、使い勝手や今  
後こうであってほしいとい  
う証言は重要だと思えます。  
講座ではこれまでの経験  
から得た教訓やTAMAL  
ASの使い勝手を議論し、  
ISBNコードの問題点に  
ついて再考します。どの  
図書館にも〈除籍と保存の  
ワークフロー〉があると思  
いますが、あまり共有され  
ることはありません。この  
機会に、実務の知恵を出し  
合っで一緒に考えていきたく  
いと思えます。

ぜひおいで  
下さい。



## ◆総会記念講演

### 図書館の「捨てる」残す」への期待と不安

―出版産業の危機の中で  
／書き手として、利用者  
として



5月21日の総会終了後、永江朗氏（著作家）による記念講演会を開催しました。取り上げられた話題は、①桑原武夫氏蔵書廃棄問題。教育委員会は遺族に謝ったと言われているが、図書館の蔵書は、すべての京都市民、すべての人々の共有財産。寄贈先として図書館は適切だったのか。図書館員

はコレクションの意味を分かっているのか。②図書館は何を収集し、どう残すのか。資料の保存について、誰がどのように決めているのか、納税者や利用者には不透明である。③蔵書を図書館へ寄贈するより、古本屋に売って、古本市場へ流した方が本は生きる。④図書館と新刊書店は役割が異なる。⑤「出版産業の危機」は、新刊市場の縮小に合わせたビジネスが展開できていないこと。⑥読書率はほとんど変わっておらず、現役世代が買う書籍の冊数も42年前と変わっていない。変わっているのは、新刊市場だけが本の市場ではなくなくなったこと。⑦公共図書館の年間個人貸出冊数が新刊販売冊数を上回るなど、1970年代に比べると本に接する機会は多くなっている。⑧「出版産業の危機」ではなく、出版流通の危機と言

うべきであり、流通システムを変えれば、本は生き延びられる。本当は共謀罪、安保法、秘密保護法など「言論の自由」をめぐる問題の方がもっと深刻。⑨図書館の複本問題についての見解は、作家により立場は異なる。複本を問題にするのは一部の売れっ子ベストセラ―作家に過ぎない。

この講演の図書館をめぐる部分に重点を置いた報告を多摩デポ事務局の養田明子が『みんなの図書館』9月号に書いています。これも読んでください。以下、参加者からいただいた感想を掲載します。

#### 永江氏講演に 三人からの感想

#### ●匿名希望／職員若手A

大学時代の恩師の一人である、矢崎省三先生に声を

かけていただき、多摩デポの講演会に参加させていただきました。図書館や出版関係の方が多く出席されているため、興味を持つと同時に緊張しましたが、様々な意見を交わす多摩デポの皆様姿を見て、図書館の外側を含めた社会へ目を向けていかなければいけないと痛感しました。

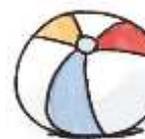
今回の講演会は、「図書館の「捨てる」と残す」への期待と不安」というテーマでした。私自身は、普段の業務の中で除架・除籍をします。除架・除籍をする際は、その本の状態や貸出状況などを踏まえています。が、「我が市における最後の1冊」やそれに近い本を除籍するか検討する際は非常に悩みます。講師の永江氏は本の著者であり利用者という事で、外部からは図書館の「捨てる」業務がどう見えているのか、どうあつてほ

しいと思われるのか、ぜひお聴きしてみたいと思います。加しました。

講演では桑原武夫蔵書廃棄問題を元に、図書館の収集・保存・研究について話をされました。この問題について、貸出実績が少なく、目録や書誌データがあることから本を捨てたということについては、永江氏もおっしゃっていたように乱暴なやり方だという意見に賛成します。例えば、図書館の中には、文学全集など、それぞれの作品が文庫などで存在しているため、あまり借りられない本があると思います。もし、それらの全集を先の問題のような理由で全て除籍してしまうとしたら、体系的に研究したい人などにとっても困ることだと思えますし、やはり図書館の除籍の仕方として問題があるように感じます。図書館の中には、利用頻度

は高くなくとも、保存しなければならぬものもたくさんあるはず。一方、市立図書館の役割について考えると、貸出しの少ない本をすべて保存しておくことの難しさも日々感じます。私自身は子どもの頃から、市立図書館は、気軽に本を読みに行ける場所、知りたいことなんでも相談できるところというイメージを強く持っています。市立図書館は図書館の中でも、特に直接市民へ資料を提供する役割が大きいのではないのでしょうか。実際に書庫に入りきらなくなると、いかに除籍するか迷う本が山積みになっている状況で、どのように保存していくのかということの一つの市立図書館だけで完結させると難しい面もあるかもしれせん。状況に合わせて、都立・県立図書館や、国会図書館、大

学図書館、博物館などとも協力して、本当に研究等で重要なものについては保存していかなければいけないのかなと感じました。



### ●匿名希望／職員若手B

大学図書館職員の私がないぜ、市町村立の公共図書館が活動の主である多摩デポの講演会に参加したのかというところ、それは今回の講演タイトルにある「捨てると残す」ということの難しさを、身をもって実感したばかりだったからです。

私の勤める大学図書館では半年前、とある急な事情によって書庫整理（という名目の大量の蔵書廃棄）を行う必要が生じ、私もその

担当の一人として業務にあたりました。どの資料を捨ててどの資料を残すかについては、ある程度の方針は事前に決めていたものの、「〇〇年以前の本は廃棄する」といったような明確な線引きをすることは難しく、やはり最終的な判断は図書館員の主観に依ることが多かったのです。短期間で目標冊数まで蔵書を減らさなければいけないプレッシャーの中で作業をしていると、一冊一冊大切に扱ってきた資料に対し、いつのまにか「捨てるための理由」を探し、「捨てる」と考えている自分に気づいて愕然としました。

桑原武夫蔵書問題について、永江氏も講演会の聴衆も、蔵書を廃棄した職員をかなり厳しく批判していましたが、私はこのような経験があったので、どちらと

もつかない複雑な思いで聞いていました。果たしてこの問題は一図書館員の専門性の問題・意識の問題なのだろうか、という疑問も浮かびます。

もちろん、桑原氏のコレクションとしての集合や、手書きのメモなど固有の情報永久に失ってしまったり、市民の財産である蔵書を一人で勝手に判断して廃棄してしまったりしたことは許されることではありません。永江氏が述べていたように、図書館には資料提供・利用だけでなくアーカイブ化・保存という重要な役割があり、資料の価値がテキストや利用回数だけで決まるものではないということも重々理解しているつもりです。

一方で、図書館の敷地を拡大するなどして蔵書の収容力を増やすことは昨今難しくなっているのです、日々

新たに資料を受入れるためには、何らかの資料を廃棄してその分のスペースを空けておく必要があります。そして、「寄贈」とはあくまで「個人または団体から無償で資料の提供を受けること」（図書館情報学用語辞典より）であって、寄贈を受けた時点でその後資料をどう扱うかは各図書館の判断となるので、他の蔵書との取捨選択の結果、寄贈された資料を廃棄すること自体は悪いことではないはず。

このように、「残すこと」の使命感や図書館の意義と、「捨てること」の実務上の必要性は、あちらを立てればこちらが立たずで、この問題にははっきりとした正解が見当たらないように思えます。せめてできることがあるとすれば、「捨てること残す」とは一つの尺度では測ることのできない資料の

価値を恣意的に比べて判断することだという意識を持つて、その判断を様々な観点から様々な人の視点で慎重に行うように心がけることでしようか。

そうして考えた時に、多摩デポの目指す共同保存図書館の重要性を改めて感じます。どんな資料もどこかで必ず残す・残る、というネットワークは、それぞれの図書館が抱えている「捨てること残す」問題の二項対立の矛盾を一気に解決してくれるからです。

大学図書館界でも、最近になって一部で共同保存の道を模索する動きが出てきました。多摩デポを追いかける形ではありますが、将来的に、図書館の狭隘化を解消する手段を廃棄ではなく共同保存にできれば、利用者・著作者・図書館それぞれにとってさらに良い蔵書構築が実現するものと期

●書店も図書館も課題は相似形？  
室谷好美（会員）

桑原武夫寄贈蔵書廃棄問題から講演は始まった。その流れで、故人の蔵書の処分について家族から相談された際、図書館への寄贈ではなく、古書店への売却を勧めると話された。「図書館にとつて寄贈は頭痛の種でもある。ならば古本市場に流した方が、本が必要とされる人に行き渡る」とのこ



と。図書館の状況を鑑みれば一理も二理もあると、うんうんと頷きながら聴講していた。だがそこはかとない違和感もあった。本に価値を付ける古書店であれば市場で必要とされる資料を熟知している。だから資料を求める人への橋渡しができる、という文脈だったと思う。けれども価値をつけられなかった資料は消えていく。それはスペースの限界から資料を廃棄する図書館と相似なのでは？

講演では「新刊書店に置かれているのはどこにでもある本。あつという間に返品されるので薄っぺらい」との話もあった。似たような薄っぺらさは図書館にも感じる。刊行され少し時間を経た専門に寄った資料は、容易に利用できないことが増えたように感じている。多数の要求には応えられないが、少数は切り捨てられる

ているということが、書店、図書館に共通しているのではないか。売上のため、資料費削減のため、陳列・保管スペースの限界から、ある程度は仕方ないことなのかもしれない。が、「仕方ない」の程度がじわじわと拡大しているということはないだろうか。

少数者に不寛容な社会は、表現・言論の自由にも不寛容な社会でもある。書店、図書館が売れない、利用の少ない資料を守るということは、文化を守るということでもある。そんな基本的なことが資料に関わる職業の人たちの中に本分としてきちんと根付いているのか。講演会の後、悶々と考え続けている。



## TAMALAS 第2回地域説明会 実施報告

6月23日(木)、TAMALAS第2回地域説明会を市町村立図書館長協議会第2ブロックの職員合同研修会として、国分寺市本多公民館実習室で開かせていただきました。このブロックは、昭島、国立、国分寺、立川、東大和、武蔵村山の六市で構成されています。参加は四市から15人でした。午前9時30分から12時までうち、前半は多摩デポ理事の堀が「公共図書館の資料保存と資料提供の基盤をめぐって」という題で小講義を行いました。後半は(株)カーリルの吉本氏が、TAMALASのラストワンプターの確認方法についてパソコンとプロジェクト

説明し、参加者がそれぞれ作業を体験しました。さらに、現在多摩デポH Pで公開している一冊一冊の入力・確認方法に加えて、大量タイトルの一括入力処理についてもダメーデータ



を使って説明しました。「多摩デポ通信」前号で西東京市図書館長に詳しく紹介もらった事例と同様のことを、ほかでも使ってもらうための試行モデルです。各市町村立図書館に自由に使用してもらえるようにするため、これも多摩デポHPで公開する予定です。

これは初の紹介でしたが、参加者からは一様に驚きと好意的な反応がありました。除籍候補資料の他自治体での重複所蔵状況を、大量一括で調査できるのなら、実務の中に組み入れやすい。それなら相当の業務軽減を図りながら効果的な保存・除籍作業が行えるのではないかと積極的な意見も聞かれました。使ってみたいが、大量一括処理システムに入れるパスワードはいつももらえるのかと具体的な質問もされました。

多摩デポ理事からは、大量一括蔵書確認システムの公開については準備中だが、広く使ってもらうには、図書館にもっと知ってもらい館長協議会としての認知がある方が今後のためによりと考えているので、その間、要望があれば、西東京市同様個別に相談に応じる、と答えました。吉本氏からは、さらに精度や使い勝手の向上を目指したいと話して終わりました。



(株)カーリルとの共同研究  
定例会報告 その11

TAMALASの次の課題が「大量一括処理」です。

現在のTAMALASは、一冊ごとにISBN番号を入力して検索をしています。研究を重ね、実用に使える検索精度を持ったシステムとして紹介していますが、図書館の仕事の現場では、除籍をする時は一度に大量に処理し判断しなければならぬことが多いことは承知しています。

『多摩デポ通信』前号で、西東京市の図書館長が紹介してくださったように、昨年からは、大量の除籍候補データを「多摩デポ」に送ってもらって機械的に一括検索して結果をお返しすることをやってきました。

次にはTAMALASをそれに対応できるように、「大量一括検索」のツールとしても公開できるようにすることが、共同研究の大きな課題となっていました。

6月23日に国分寺市で行った多摩地域館長会第2ブ

ロック説明会では、開発した大量一括処理画面を紹介し、ダミーデータを使った実演を行いました。ISBNを含む除籍資料のデータをEXCELで処理し、そのデータを大量一括処理画面に取り込むことで、多摩地域で最後の二冊以下の資料をチェックしより分けることができます。参加者から強い関心をもらいました。精度向上と使い勝手の改善をして、近いうち実装可能にしたいと考えています。

議論しているのはシステムの「見せ方」です。またホームページでの大量一括処理の運用については、そのための運用規定等の整備も必要ではないかと考え、この点も検討しています。現場の意向を踏まえ使い勝手の良いものにしていきたいのです。説明会等を希望する自治体はご連絡ください。

新理事として

考えていること

堀越洋一郎

5月総会で、堀越さんが理事になられました。大学講師をされ、多摩デポブックレット9号『電子書籍の特性と図書館』の著者でもあります。現在のお考えを書いてもらいました。

OPACデータによる「仮想多摩地区図書館総合目録データベース」の存在を仮定して、以下のような調査を、共同保存図書館の基礎調査の一つとして提起したい。

ISBNが付与されていない図書についての同定調査は大きな課題ではあるが、TAMALASの稼働により、ISBN付与タイトルに限定で、ISBNによる逐次または一括検索による

ラスト1、2のリストアップが可能となった。しかし総合目録により、ISBNを個別指定しての調査ではなく全体のリストアップが可能ではないかと考える。もちろん、各館の収集方針、除籍のタイミングにより、収集、除籍は決まるので一概にラスト1、2に該当したかどうかを除籍調査の必要性がない内に提起するのは業務から逸脱する話とは思いますが、①除籍調査の結果、ラスト1、2については除籍しない、②ラスト3の場合には除籍対象となりうる、を前提とすれば、ラスト3となった場合は次のようになると言える。つまり、ラスト3は除籍対象となり対象館（または調査館）で除籍されれば、その図書はラスト1、2となり、次の除籍調査を待つことなく保存対象になる。

現在、除籍調査によりラ

ラスト1、2となった図書について各館の図書館システム上に識別出来るようになってくるのか、また記録はせず該当書にシールなどで目印を付けるなどの処理が行われているか、一律ではないと思うが、各館の独立性を考慮しても調査の結果が各館内に留まらずに多摩地区全体で共有できないかと思う。

総合目録調査により、具体的に各館がラスト1、2にあたる図書をどのくらい所蔵しているのかを調べることは可能であろうし、今後の蔵書数の増加に対してラスト1、2の割合を示すことは、その結果が図書館の収集方針、蔵書計画を縛りかねないとしても数の提示だけでも有用ではないか。そして、ラスト1、2、3について刊行年、分類、件名などによる統計を取ることは、リアルな共同保存図

書館の（ISBN付与分）所蔵数を量るための基礎的な数を明らかにする一歩にもなると考える。

リアル・デポジット・ライブラリーについて

平山 恵三  
（多摩デポ顧問）

昨年秋に体調を崩し、以来、山梨県北杜市の自宅から多摩へ出かけたのは2回だけとなってしまいました。今年5月の総会では多摩デポの理事を降りさせていただき、みなさまに感謝しております。

さて、課題のデポジット・ライブラリーのことですが、バーチャルの方はシステムがアップしていくので、わくわくです。

で、ここでは、リアル・デポジット・ライブラリーのことをちよつと考えてみ

たいと思います。

資料を大雑把に分けますと、先ず、出版物とそうではないものに、次いで、このどちらにも地域資料とそうではないものがあり、更に、それらどちらの資料にも、ISBNコードのあるものとないものがある、ということになるかと思えます。

すると、ISBNコード付きの資料のデポジットはバーチャルが大得意ですね。問題はISBNコードの無い資料ですが、これはリアルに向いているでしょうね。ただ、このうちの出版物は、新たなコードを用意するなどしてバーチャルにも加えていけるのかな、なども思案します。

また、地域資料には、ISBNコードのあるものもないものがありますが、どちらにも、私は、リアルが欲しいです。地域資料には、

タイトルでは中身を察しきれない資料が少なくありません。なるべく身近で現物に接することのできる環境が欲しいところです。

ところで、多摩デポでは、初めはおのずと全分野の資料でのリアル・デポジット・ライブラリー構想でした。しかし、リアルな図書館設備など、それはとても無理という事態に当面し、とりあえずということでは、バーチャル・デポジットを採り上げたのでした。で、リアルの方は、今でも全分野の資料でと、なんとなく思われているかもしれませ

ん。しかし、以上のように資料を分けてみますと、バーチャルとリアルの構築は、全ての資料についての両建ては将来のこととして、当面は、バーチャルとリアルの分担がよいのではないのでしょうか。ただ、ISBN

コードのある地域資料などはバーチャルとリアルで共有がいいですね。この分担によって、リアルは小規模かつコンパクトになり、構築も容易かつ現実的になるうかと思えます。

基本的にバーチャルには困難なものと地域資料はリアルに、ですが、その際、希少な資料は、上等な複写機も用意して、複製を作り、複製保存するのも手ですね。そして、コンパクトなリアルならば、都立か市立の図書館にスペースと電気と水をお願いできないものではないでしょうか。

前身の任意団体発足時から会の運営を支えていただいている平山恵三さん（エル経済研究所代表）が今年度から副理事長を退任し新たに顧問に就任されました。この機会に書いていただきました。

## ブックレット第11号完成

遅くなりましたが、多摩デポブックレット『書物の時間―書店店長の想いと行動―』が完成しました。

著者福嶋聡氏には昨年2月、「第25回多摩デポ講座」で、「紙の本は滅びない」の演題でお話ししていただきました。ポプラ社新書として発表した『紙の本は滅びない』（2014年）の刊行から2年、書店店長としての福嶋氏の「本」への想いは拡がりを増し、（ヘイト本）や書店へのクレーム問題などその後の状況も踏まえ、多岐に及ぶ話題に、生きのいい率直な見解を話していただきました。

ブックレット化にあたっては、講演題と異なるタイトルとしました。お話が、書店と図書館だけでなく、



古書店や著者や出版社のことにまで及び、それぞれの持つ役割や時間をよく整理してくださいからです。

新刊書店には新刊書店の、古書店には古書店の、図書館には図書館の、それぞれの本がそれぞれの時間を持っている。「本というのは“読みたくなつた時が新刊”なのであって：略：“読みたくなつた時が出会いのとき”なのです。」の言葉には、出版と本と読書に関わる全ての人が勇気をもらえるのではないのでしょうか？

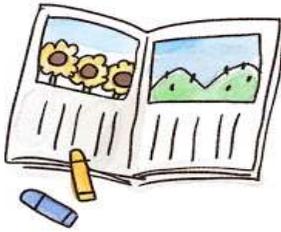
福嶋さんの考え方の柔軟さとフットワークの軽さは、書店員や図書館員に限らず、もつと広く多くの方々の仕事や生活にもヒントを得られるものと思います。

講演を聴き逃した方は是非、聴いた方は改めて、このブックレットを手にしてみてください。きっとモヤモヤが晴れてきます。

## 永江氏「文化通信」記事

出版流通・書店界の業界紙「文化通信」の記者が講演会を取材に來られ、永江朗氏の講演を「本を「生かす」ということ」というわかりやすい要約記事にしてくれました。「文化通信」B5月29日号「掲載。会員の方にはこのコピーを同封します。お読みください。」

図書館での保存に限らず、本や出版の危機の問題を論じて、広い視野を与えてくれます。この講演録は、現在、ブックレット化の準備を進めています。



## 「よみうりたま手箱」

『読売新聞』多摩版の「よみうりたま手箱」に図書館コラムを不定期連載中。しかし多摩地域内でも配布エリアは限られるようです。

会員には『多摩デポ通信』前号以降に掲載された分を同封しています。

▼5月17日

『読みたい』に答える使命  
(荻田明子)

これは総会に参加された方には会場で紹介したものです。その後、執筆してある分もあるのですが、高校野球地区予選の大大報道に押され、掲載は延び延び。なのになんだよ、清宮君！（ひいきの問題じゃないけど）



## ★会の現勢

2017年8月1日

現在

### ●正会員

(個人会員88名)

(団体会員2団体)

### ●賛助会員

(個人45名)

(団体1団体)

会の活動はみなさまの会費・ご寄付で支えられています。新年度に入っただけはいますが、まだの方はどうぞよろしくお願いします。

### ●年会費

正会員(個人・団体) 五千円

賛助会員一口 二千円

(個人一口団体五口以上)